



主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団

見学コース：	①午前9時 30 分	②午後 1 時 00 分	瀬戸蔵ミュージアム展示説明
(予定時間)	10 時 10 分	1 時 40 分	瀬戸蔵出発
	10 時 30 分	2 時 00 分	小長曾窯跡到着・説明
	11 時 10 分	2 時 40 分	小長曾窯跡出発
	11 時 30 分	3 時 00 分	瀬戸蔵到着・解散

今回見学する文化財とその関連年表

1

I . 国指定史跡「瀬戸窯跡」

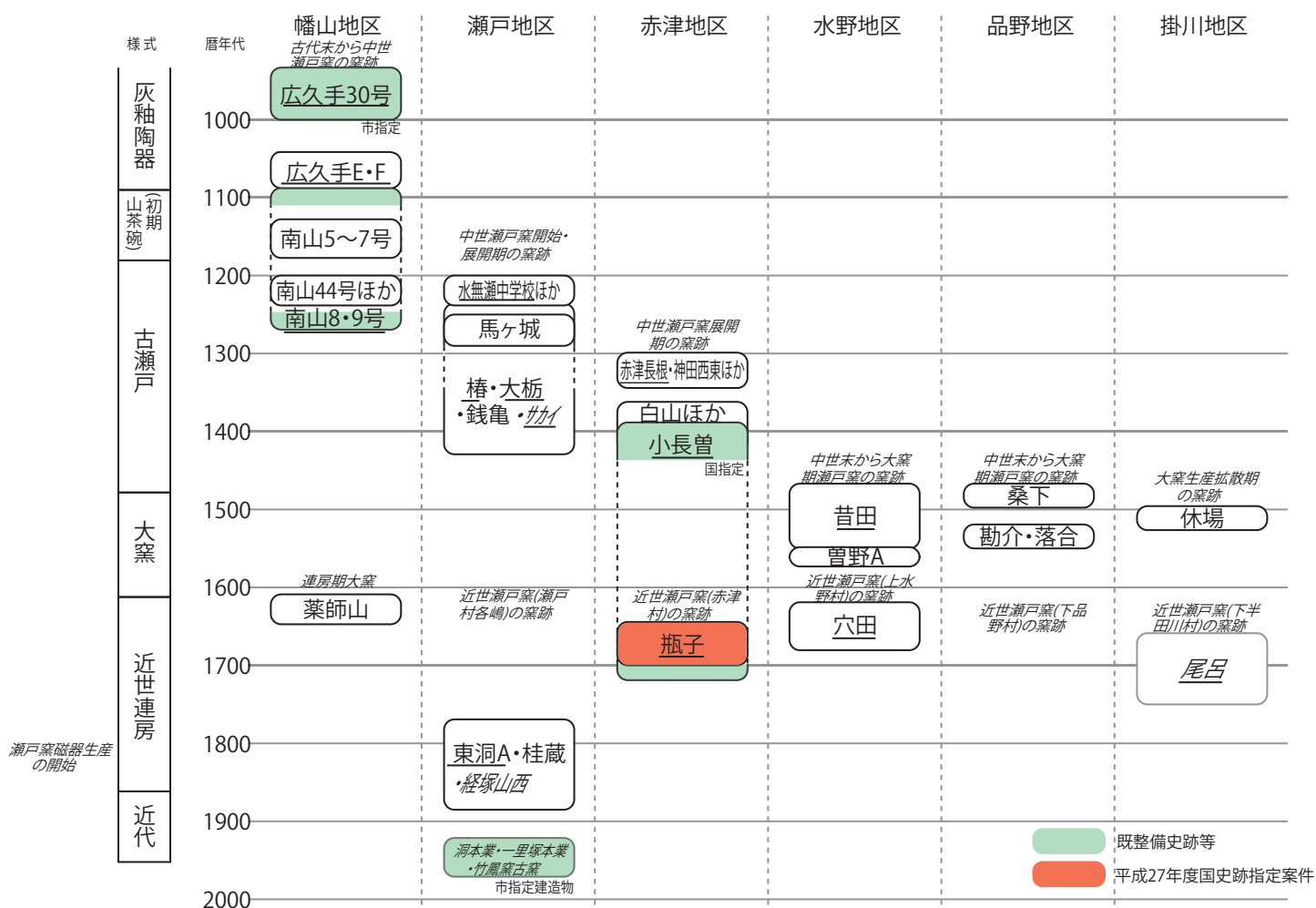
1,000年以上のやきものの歴史をもつ瀬戸市域には、平安時代から今日に至るまでの窯跡が800基以上確認されています。それらの中でも、窯跡の残存状況が良好なものや歴史的・文化財的価値の高いものを、将来にわたって保存活用していくべき遺産として抽出していく必要があります。

しかし、瀬戸市域では、これまで国指定史跡は東白坂町の「小長曾陶器窯跡」1件のみでした。そこで、平成11年度から18年度まで窯跡を中心とした市内重要遺跡の確認調査を行い、県内窯業遺跡保存検討会等を経て

101遺跡を抽出しました。その後、平成27年6月19日の文化審議会答申で、瀬戸市内の窯跡全体を「瀬戸窯跡」としてまとめて捉える方向性が示され、同年10月には「瓶子陶器窯跡」が国の史跡に加えられました。

その中でも、昭和46年に瀬戸市域で最初に指定された小長曾陶器窯跡は、今年で指定50周年を迎えます。今回の「せと歴」は、長きにわたって注目されてきた小長曾陶器窯跡にスポットをあて、これまで行われた数々の調査成果も踏まえて紹介していきます。

瀬戸市内重要窯跡等 時期・地区別一覧



※市内重要窯跡は、(財)瀬戸市文化振興財団2008『瀬戸窯 瀬戸市内重要遺跡試掘調査報告』より引用し記載(斜字は対象外) 遺跡名下線は既発掘調査窯跡を示す。

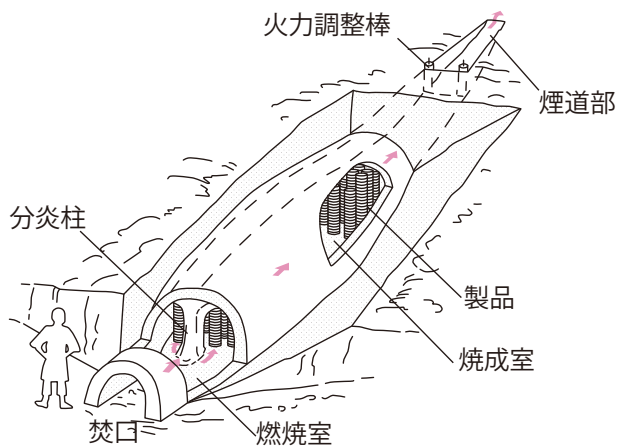
Ⅱ．瀬戸の窯跡

瀬戸市内で確認されている 800 か所以上の窯跡は、全て同じ窯のかたちをしているわけではなく、時代とともに変化していきます。それらは大きく「窖窯（あながま）」・「大窯（おおがま）」・「連房式登窯（れんぼうしきのぼりがま）」の 3 つに分けられます。

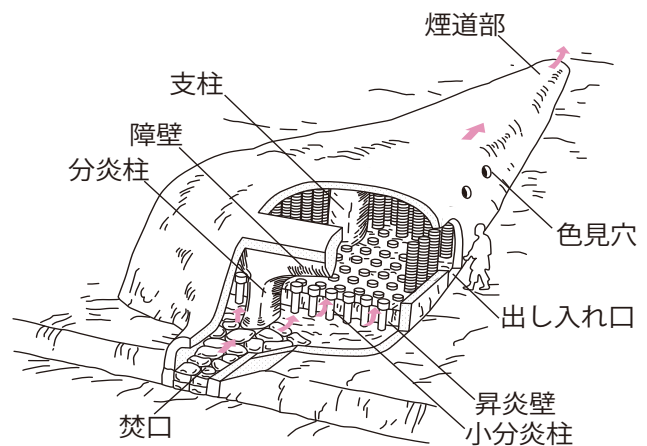
瀬戸市域ではじめて築かれた「窖窯」は、丘陵斜面をトンネル状に掘り抜いた地下式もしくは半地下式の窯で、製品を焼くための部屋（焼成室）が 1 つのみの単純構造となっています。平安時代から室町時代までの約 500 年にわたり築かれ続けました。

「大窯」も窖窯同様焼成室は 1 つですが、天井が地上に構築された地上式の窯で、天井を高く架けることにより、窯の中の容積が大きくなり、生産量が飛躍的に上がりました。また、新たに設置された「昇炎壁」や「障壁」は、大きくなった窯内の温度を高く保つために工夫されたものです。戦国時代を中心に使われました。

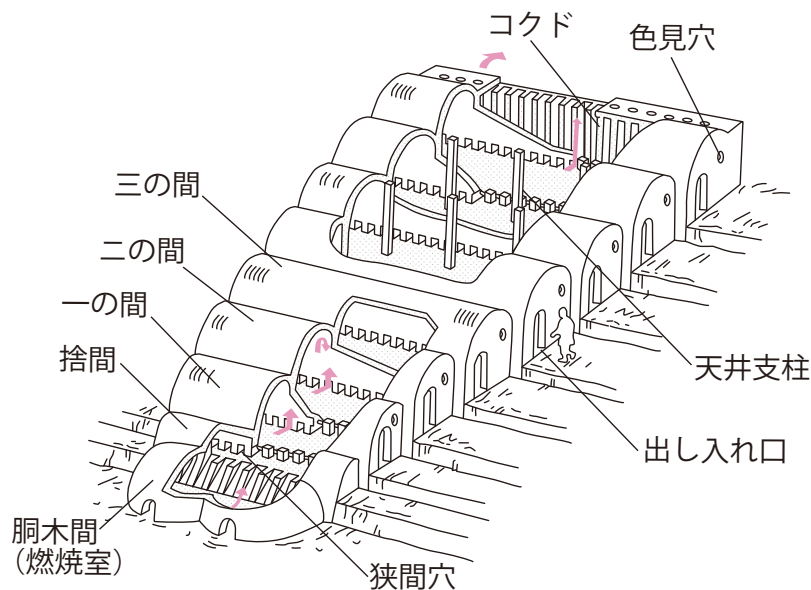
江戸時代から登場する「連房式登窯」は、窖窯や大窯に比べて容積の小さい焼成室が階段状に連なった構造の窯で、生産量はさらに大きくなりました。下の焼成室から上がってきた熱をそのまま利用できるため、非常に熱効率の高い窯体と言えます。



窖窯



大窯



連房式登窯

Ⅲ．窯跡の記録

数多くの窯跡が遺される瀬戸市。今でも、その窯跡に興味を抱く人は数多くいますが、それは昔の人々も同じでした。その証拠に、江戸時代には主に中世の窯跡（窖窯や大窯）を「古窯」として記した文献がいくつもみられ、「古窯」から見つかるやきものには優品が多いと評価している事例もあります。ここではまず、江戸時代に記された「古窯」に関する史料を紹介します。

描かれた古窯跡

天保15年（1844）に前編が、明治13年（1880）に後編が刊行された『尾張名所図会』には、尾張国内の神社仏閣を中心とした名所が、尾張藩士で画家の小田切春江らの挿絵付きで紹介されています。その中に、「藤四郎古窯址」として、おそらく窖窯と思われる窯跡が描かれており、同じような場所が赤津の山の中に数か所あると記されています。いずれも磁器（おそらく陶器）が大量に埋まっており、昔が忍ばれるとしていることから、当時の人たちにとっても、この窯跡に興味を抱いていたことがよくわかります。

ここに描かれた風景は、おそらく現在も「遺跡」として登録されている窯跡かもしれません。どこの窯跡を描いているのかはわかりませんが、焚口付近と思われる場所に大きな穴が開き、草木に覆われている様子は、かつてその場所でやきものを焼いた窯が、長い年月を経て朽ち果てていった様子を伝えています。



藤四郎窖（窯）址

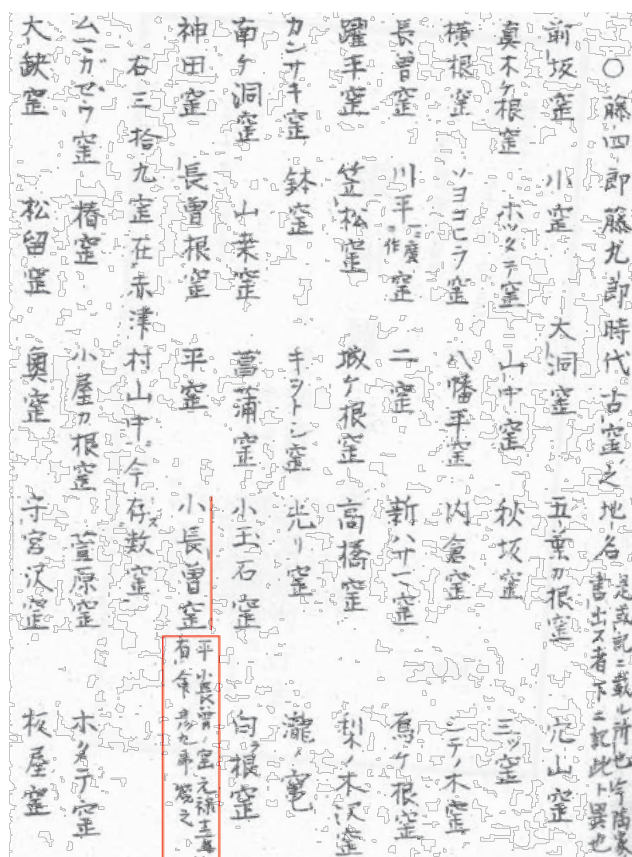
藤四郎の窖址といひ傳（伝）ふる
所瀬戸赤津の山中に數（数）ヶ所
ありて何れもち中（地中）に破たる
磁器夥しく埋もれむかし
忍ばしきさまなり
しかれども今何れを
夫ともきはめては
いひがたし
因て其
中に就
て一圖（図）と
書き闕
略を
補ふ

闕略（けつりゃく）
＝欠けているものの意

張州雜志の記述

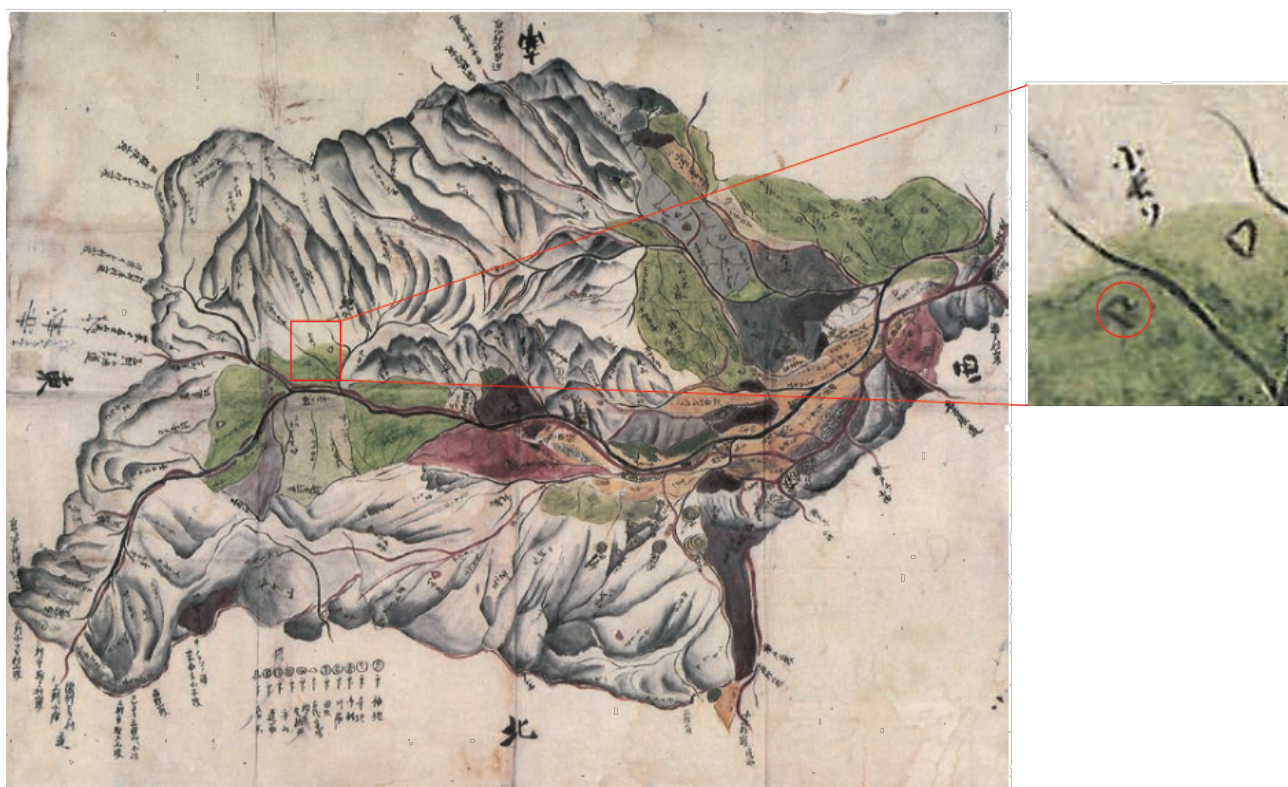
『張州雜志』とは、尾張徳川家9代藩主徳川宗睦の命により、尾張藩士である内藤東甫によって著された地誌です。東甫が安永年間（1772～1780）頃から尾張藩領内を調査して執筆したもので、天明八年（1788）に完成しました。その中に、「藤四郎藤九郎時代古窯之地名」として39基の古窯の名が記されています。「藤四郎藤九郎時代古窯」とは、おそらく窖窯や大窯、すなわち江戸時代より前に使われた窯のことを指していると思われます。古い時代の窯跡をこのように記録していることから、当時の人々がいかに窯跡に対して関心が高かったかが窺えます。

また、興味深いことに、この記述の中に「小長曾」の名がみられます。さらにその下に「平小長曾窯 元禄十二年 有命彦九郎焼之」とありますが、この記載は小長曾陶器窯跡の特殊性をよく表しています。



赤津村絵図

具体的な製作年は不明ですが、江戸時代に描かれた『春日井郡赤津村絵図』には、「△印 古代竈場」として、窯跡の位置が示してあります。その中に、「小長ソ」の文字をみることができます。付近には2つの△印がみられますが、川との位置関係から、向かって左側が「小長曾陶器窯跡」であると思われます。いずれにしても、古い時代からこの窯跡の存在が知られていたことがわかります。



春日井郡赤津村絵図（年不詳）

IV. 小長曽の発掘

少なくとも江戸時代にはその存在が知られていた小長曽陶器窯跡。この窯については、現在まで様々な調査が行われてきました。

本窯について行われた本格的な発掘調査は戦後間もない昭和 21 年（1946）で、これは瀬戸市内で行われた最初の学術調査であったと言われています。ただ、本窯については明治 38 年（1905）に寺内半月によって縮写された窯の実測図が遺されており、半月が「全形を存し、瓷器時代の古窯を考察するは只此窯を見るのみ」と評するほど遺存状態が良かったことが窺えます。逆に言えば、そうした遺存状態が本窯を保存するための動きに繋がっていったといえるでしょう。

昭和 44 年、窯体の周囲に覆屋とフェンスが設置され、昭和 46 年には瀬戸市域で最初の国指定史跡となりました。その後、再整備を行うための調査を平成 7 年（1995）、8 年、12 年、14 年、15 年に行い、現在の姿となっています。



整備される以前の小長曽
(昭和 44 年以前)



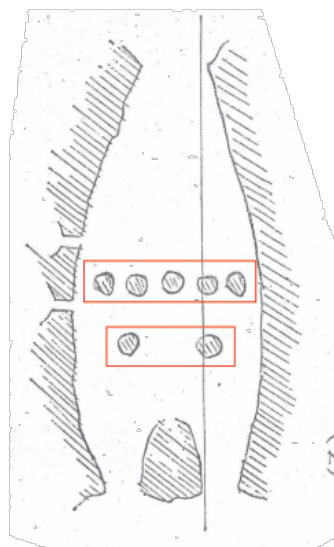
昭和 44 年に設置された旧覆屋



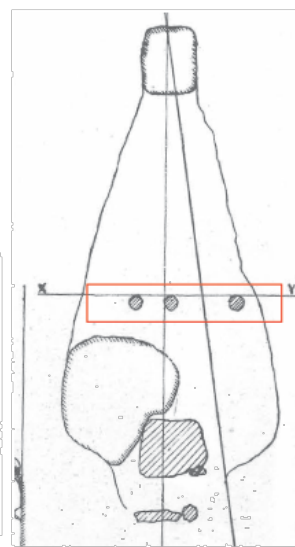
平成 14 年 覆屋撤去時の小長曽

小長曽陶器窯跡の実測

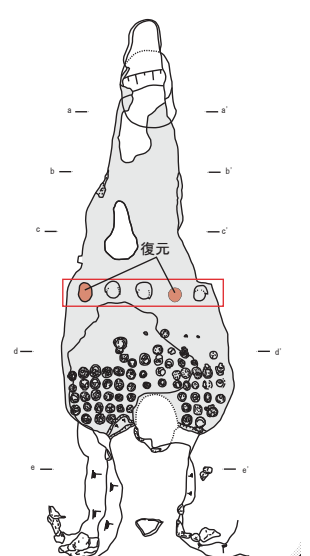
本窯についてはこれまでに明治 38 年（1905）、昭和 21 年（1946）、平成 14 年（2002）の 3 度にわたって実測図が作成されています。この記録を見ると、窯の輪郭や天井支柱の数など、様々な違いが見られます。



明治 38 年



昭和 21 年

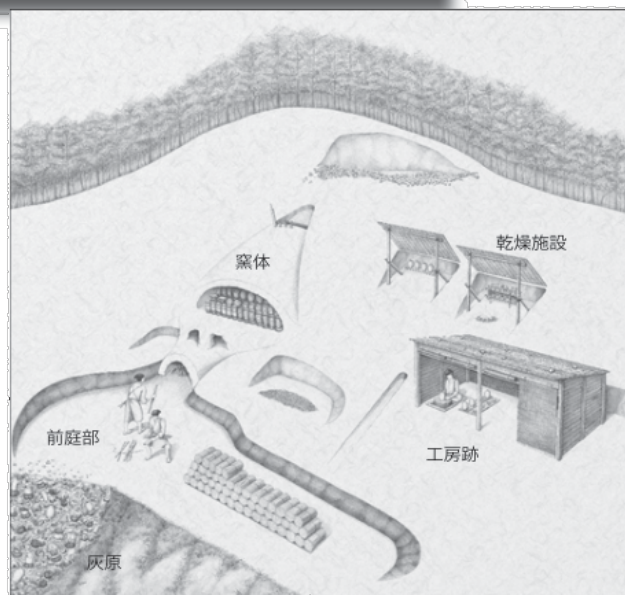


平成 14 年

V. 室町時代の小長曽

小長曽陶器窯跡の窯体は、基本的に地下式の窖窯構造であり、周辺から出土する遺物のほとんどが「古瀬戸」と呼ばれる、中世の日本で唯一釉薬を施したやきものです。この古瀬戸の生産年代は14世紀末～15世紀初頭と考えられており、これまでの発掘調査で21万点以上の破片が出土したことから、本窯でいかに多くの古瀬戸製品が生産されたかがわかります。

窯跡は、基本的にやきものを焼くための「窯体」とその前に広がる平坦な場所である「前庭部（ぜんていぶ）」、製品をロクロでつくりたり、乾燥させたりした「工房跡」、焼成に失敗した製品を捨てた「灰原（はいばら）」で構成されますが、本窯跡も例外ではなく、非常に良好な状態で保存されています。

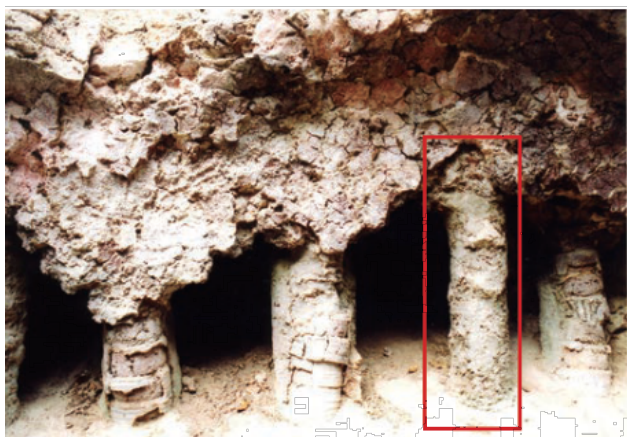


小長曽陶器窯跡復元図

窯体周辺の調査



新たな覆屋に建て替えるため、昭和44年に設置された旧覆屋を撤去した時の様子（平成14年調査時）。



5本みられる天井支柱のうち、向かって右から2番目と一番左の支柱は、昭和21年の図面には描かれていません。今みられるのはおそらく昭和46年の旧覆屋建設時前後に復元されたものと思われます。



粘土の塊が所々に貼り付けられた窯内。おそらく、この窯が実際に使われていた時代に壁を補修した痕跡と思われます。



煙道部のさらに上に、大量の焼台が出土しました。焼台とは、傾斜した床面に製品を窯詰めする際に使われる窯道具で、この場所に投棄したということは、製品の出し入れを煙道部からも行った可能性が高いと考えられます。

工房跡の調査



窯体の右側には、古瀬戸を生産する過程で必要な施設（工房跡）が遺されていました。その中には焼成前の製品を乾燥させるための施設や製品をロクロで成形するための工房があったことがわかりました。



ロクロで成形した生乾きの製品を乾燥させるための施設です。柱の跡が見つかったことから、簡易な屋根があったと考えられます。また、床面には赤く焼けた跡があり、この施設の中で火を焚いていたことがわかります。



ロクロの軸を据えるための小さな穴をもつ遺構をロクロピットと呼びます。小さな穴には軸を固定するための粘土が詰められています。

灰原の調査



平成12年（2000）に発生した、東海集中豪雨によって、本窯跡の灰原部分が大きく崩落し、中に埋まっていた遺物が大量に流されました。これを機に、灰原部分の擁壁工事を行うことになり、それに伴い崩落部分の精査を行いました。



崩落した部分の炭や遺物を取り上げた状態。元々の地面が露出し、本窯が操業する前の地形が明らかになりました。



調査後の灰原の堆積状況です。炭が厚く堆積しており、最も深いところで1.6mを測りました。幾度となく窯に火が入れられたことを物語っています。

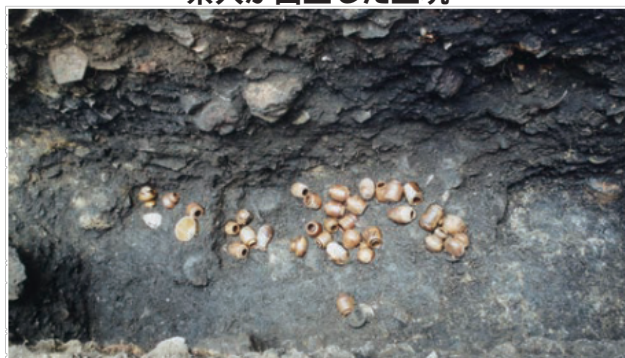
Ⅵ. 江戸時代の小長曾

既に紹介した『張州雑志』の記述には、「平小長曾窯 元禄十二年 有命彦九郎焼之」という文言も見られます。これは、「元禄 12 年 (1699) に、彦九郎が (藩主の) 命令により平・小長曾窯で焼き物を焼いた」という内容で、さらに小長曾陶器窯跡周辺では、かねてから江戸時代のものと思われる播鉢や窯道具などが採集されていたことから、室町時代の窖窯を江戸時代に再利用した可能性が高いと考えられていました。

平成 12 年、窯体の前に広がる前庭部の調査を行った際、不自然に掘られた大きな土坑が見つかりました。直径約 5m、深さ 1.5m ほどのその土坑の最も深い場所から、江戸時代のものと思われる茶入や碗など、いわゆる茶陶がおおよそ 40 点、まとまって出土し、張州雑志の記述が事実であったことが初めて証明されました。したがって、現在見られる窯の天井支柱も、江戸時代の再利用の際に取り付けられたものと考えられています。



茶入が出土した土坑



茶入の出土状況

Ⅶ. 尾張藩の御用を勤めた窯

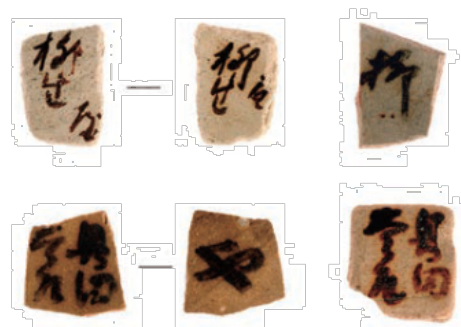
小長曾陶器窯跡が、江戸時代において尾張藩からの注文生産を行っていたことはほぼ間違いないと考えられますが、本窯の他にも尾張藩の御用を勤めたと考えられる窯は遺されています。1つは、平成 27 年に国の史跡に指定された「瓶子陶器窯跡」。そして、もう 1つは「城ヶ根窯跡」です。

17 世紀後半に操業した瓶子陶器窯跡は、確認された 2 基の窯体のうち、1 基は前半部が戦国時代に主に使われた「大窯」構造となっており、そこから茶陶である茶入がまとまって出土しました。さらに、灰原からは尾張藩士の名が書かれた「付札」が出土していることから、尾張藩の御用により茶陶生産を行っていたことがわかりました。

一方、城ヶ根窯跡は小長曾陶器窯跡とほぼ同年代の室町時代の古瀬戸製品と江戸時代の製品が採集されており、その内容が小長曾のそれと非常に似ていることから、張州雑志の記述にある「平小長曾窯」のうち、「平」の窯がこの城ヶ根窯跡ではないかと推測されています。



茶入の出土状況 (瓶子陶器窯跡)



尾張藩士の名が書かれた付札 (瓶子陶器窯跡)

今後のスケジュール

<9月>

せと歴！ 民吉と民次をめぐる

日 時：9月18日（土） 午前9時30分～11時30分・午後1時30分～3時30分

集合・解散場所：パルティセと 北出入口

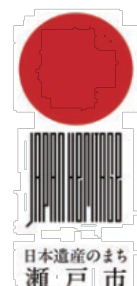
★定員各部 20 名

瀬戸市歴史文化ホームページ

昨年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～1000年以上の歴史を誇るせとものまち 陶都瀬戸～」を開設しました。

これまでに開催した『まちめぐり』の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック『千年続く誇りを巡る旅』、瀬戸を知るテーマ別ガイド『のんびりじっくりせとマップ』、瀬戸の百科事典『瀬戸ペディア』などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：<http://seto-guide.jp/>



主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団